

覧のとおり、この町に住むのには良いのですが、水が悪く、この土地は流産が多いのです。』この町エリコはヨシュアの時代にも出てくるように、古くからあった町です。そこの人々がエリシャに、エリコは水の質が悪くなく、それが理由かどうかわかりませんが、言い伝えに依れば流産が多いというのです。

②塩を盛って (20)「すると、エリシャは言った。『新しい皿に塩を盛って、私のところに持って来なさい。』人々は彼のところにそれを持って来た。」した。すると、エリシャは躊躇なく言ったのです。「さあ、新しい皿に塩を盛り、私のところに持って来なさい」と。塩は岩塩から得たり、普通の海水の6倍もあるという死海(塩の海)があることから、比較的豊富に供給されていました。塩は食料ばかりでなく、「地の塩となれ」という主のお言葉のように、腐り防止の役割に用いられ、全焼のいけにえに用いられることもありました。

③水をいやし (21~22)「エリシャは水の源のところに行って、塩をそこに投げ込んで言った。『主はこう仰せられる。『わたしはこの水をいやした。ここからは、もう、死も流産も起こらない。』』こうして、水は良くなり、今日に至っている。エリシャが言ったことばのとおりである。」預言者エリシャは、水の出る泉か、井戸のある所に行きました。そして、用意させた塩をそこに投げ込んだのです。その上で、主からいただいた御言葉を伝えました。「わたしはこの水をいやした」。いやすという言葉は、人間や動物に使われることが多いのです。ところが、主はここから出る水をいやすして下さるというのです。その通りに、その地の水質は改善して、飲料水によって死や流産などが起こりにくくなったというのです。気を付けるべきことは、塩がこれをなしたのではなく、塩はあくまでも道具として用いられ、神の力がそこに現れたということです。

3. 禿げ頭というからかい (23~25節)

①ベテルの町の子供達 (23)「エリシャはそこからベテルへ上って行った。彼が道を上って行くと、この町から小さい子どもたちが出て来て、彼をからかって、『上って来い、はげ頭。上って来い、はげ頭』と言ったので、」。さて、エリシャはエリコからは西に20キロほどにあるベテルに行きました。アブラハムが祝福の啓示をいただいた地ですから、由緒のある地です。ところが、この町に入ると、小さい子どもたち(青年という説もある)がやって来て、預言者をからかったのです。「上って来い、はげ頭」「や~い、禿げ頭」というところでしょうか。

②二頭の雌熊が (24)「彼は振り向いて、彼らをにらみ、主の名によって彼らをのろった。すると、森の中から二頭の雌熊が出て来て、彼らのうち、四十二人の子どもをかき裂いた。」すると、エリシャは振り向いて、子供たちをにらみつけたかと思うと、神の御名によっ

て彼らをのろったのです。二頭の雌熊が42人の子供たちをかき裂きました。

③カルメル山 (25)「こうして彼は、そこからカルメル山に行き、そこからさらに、サマリヤへ帰った。」その後、エリシャはエリヤもよく通ったカルメル山に行って、おそらくはあの子供たちのことを含めて祈ったのでしょうか。その後、サマリヤにもどったとあります。《結論》今朝の聖書箇所を読んで、エリヤの後継者エリシャについて疑問を持った方もいらっしゃるかもしれません。それは何と言っても、ベテルにおいて子供たちになしたことです。自らの禿げ頭という外見をはやし立てられたからといって、怒りをあらわにして呪い、結果として彼らが熊によって命を奪われることになってしまったというのでは、なんとも大人気ないのではと思われるからでありましよう。

しかし、ここにあるエリシャの動静を見るならば、預言者としてエリヤの後継を担ったことは明らかです。すなわち、エリヤが残していった外套を、師であるエリヤと同じように、水を打つとヨルダン川が二つに割れたということは顕著な現れです。その後も、エリコの水質の質を、塩を用いて浄めたということにも、あらわれています。それは、エリシャ自身がエリヤに願い求めたことで、エリヤの約束を、主が成就して下さったこととなります。それでは、エリシャはどうしてベテルの町に入って、人間的にはなんとも後味の悪い行動をなしたのでしょうか。思うに、エリシャをはやし立てたその町の子供たちの背後には、不信仰な大人たちがいたのではないのでしょうか。かつては契約の箱がおかれていたことのある由緒のある信仰の町は、その内部において腐りが始まっていた可能性があります。その大人たちが、預言者と聞いて、見に行かせたところが外見は禿げであるエリシャを見て、その外見は颯爽としてはいない。そこで彼をさげすみ、子供達に「や~い、禿げ頭」と言わせたのではないのでしょうか。預言者に対する敬意が微塵もない。神を畏れる様子がないのです。結果としては、その子供達が犠牲となることになりましたが、この町の人々の信仰は、それほどのショックな事を通してでも正されなければならなかったのです。それはエリシャを通してなされた、主の御業なのです。

讚美歌 262 番の冒頭には「十字架のもとぞ、いとやすけき、神の義と愛の、あえるところ」とあります。私たちは圧倒的な神の義によるお裁きに遭遇する時に、うろたえます。今朝の聖書箇所の出来事はそうしたなかでも、厳しい場面であります。しかし、新約の世界に入った時に、私たちは想像もできないような神の愛をいただくこととなります。この讚美歌に「十字架のもとぞいとやすけき」とありますが、底もわからないほどの罪人である者たちのた

めに、身代わりとなって十字架に上って死んでくださったイエス・キリストが示されるのです。この方の犠牲によって、神の義と神の愛は結合して私たちに福音として迫ってくるのです。

私達もベテルの町の人々と同じように、その内に腐りが入っている者達ではないでしょうか。胸に手をおいて考えてみてください。そのままであるならば、私達もベテルの子供達のように、神の義の前に、罰を受けなければならないのです。しかし、救い主であるキリストが、あなたの代わりに死んでくださるという大いなる恵みをくださったのです。改めて、主の愛に感謝しつつ、なおも腐りやすい自らの罪性を覚えて悔い改め、十字架の主を仰いでいきたいのです。